



Title	ポリワーノフ覚え書
Author(s)	福田, 益和
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1992, 33(1), p.1-13
Issue Date	1992-07-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/15302
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-22T09:33:00Z

ポリワノフ覚え書

福田 益 和

A note on “Polivanov”

Yoshikazu FUKUDA

（一）時代の子

19世紀中ごろから産業革命の波はヨーロッパ大陸、更にはアメリカ合衆国にも波及し、その間に資本主義を成長させて行く。資本の蓄積は一段と進み、列強はそのはけ口としての市場を海外に求め、発展のおくれていた国々を植民地化することになる。こうした列強の帝国主義的進出は、やがてそれぞれの利害の対立・衝突となって表面化した。19世紀末から20世紀初頭にかけての暗雲ただよう世界情勢はやがて第一次世界大戦（1914～1918）へとのもりこんで行くのである。

1891年、ロシアは独・墺の脅威に対抗して「露仏同盟」を結び自国防衛の策をとった。ちょうどその年の2月28日、ロシアの一都市スモレンスク（Smolensk）に一人の男児が誕生。エヴゲーニ・ドミトリヴィッチ・ポリワノフ（Evgenij Dmitrievich Polivanov）である。父はドミトリ・ミハイロヴィッチ（Dmitrij Mixailovich 1840－1918）、母はエカテリナ・ヤコヴレヴナ（Ekaterina Jakovlevna 1849－1913）。父ドミトリは公立図書館や鉄道関係の仕事に従事、母エカテリナは作家・ジャーナリストとして活躍、新聞「スモレンスク・ヘラルド」にもかかわっていた。ポリワノフの誕生時、両親とも高齢で、二人にとって彼は孫にも似た愛情を寄せるべき対象ではなかったか。当時、ロシアにおいても資本主義の発達は顕著で、中央都市部においては次々と大工業が生まれ、それ等の工場労働者を軸としたマルクス主義の運動がわき起り、この気運がまもなく社会民主党の結成（1898年）へとつながることになる。後年、有数の言語学者・東洋語学者・文学研究者として名を成すポリワノフが、一方で、革命後のソヴィエト政権の中で共産党員として積極的に働き、やがて疎んぜられ、ついには獄死という破局にまで追い込まれて行くことを思えば、彼も時代の子、それも世界史に残る激動の荒波の中に翻ろうされた姿が目に見えてくるのである。日露の歴史にとって不幸ともいえるべき日露戦争（1904－1905）を少

年ポリワノフはどんな眼差しで見つめていたのだろうか。

17歳に達した彼は、リガ (Riga) のアレクサンドロフスキー高校を卒業、同年 (1908)、サンクト・ペテルブルグ大学文学部に入学、一年後同大学の東洋語学部日本語学科にも籍を置くことになる。彼と日本語・日本との縁はここに端を発する。

ポリワノフの経歴を眺めていると、彼によく似た生涯を送った、同じロシア人をわれわれは自ずから想起するであろう。日本では『月と不死』¹⁾などの著者として知られるニコライ・アレクサンドロヴィッチ・ネフスキー (Nikolai Aleksandrovich Nevskii) である。ネフスキーは、ポリワノフの生まれた年の翌年 (1892)、それに月も同じ2月の、18日の誕生である。二人はちょうど一つ違いということになる。古都ヤロスラヴリ市 (Yaroslavl') が誕生の地。両親に早く死別したネフスキーは、ルィビンスク市 (Rybinsk) で育った。二人は同時代に生をうけ、運命の波にのみこまれながら似たような軌跡をたどる。

(二) ポリワノフとネフスキー

一つ年違いの二人の俊秀は、サンクト・ペテルブルグ大学で研鑽を積むが、この地ペテルブルグは日本研究のメッカとも言える所で、18世紀初めにピョートル大帝の命で日本語学校が設けられ、その伝統を受け継いだ同大学には東洋語学・日本語学の研究を目的とする学究が集まって来たのである。

ところで、当時、同大学の日本語科の講師として黒野義文 (よしぶみ) なる人物がいたことが注目される。彼は名前からわかる通り、日本人で、ロシアに帰化していた。ネイティブスピーカーとして日本語を指導していたものと考えられる。ポリワノフ・ネフスキーともに、この黒野義文のナマの日本語を直接耳にしていた筈である。西村庚氏によれば、²⁾ 黒野は明治5年 (1872)、神田駿河台のニコライ露学校に学び、翌年新設の東京外国語学校 (一橋高商の前身) の露語上等第6級に転入、母校のロシア語担当の助教授になった人。しかし、学校の改廃問題に絡んで母校を退き、以後はロシア語文献の翻訳、「露和字彙」の編纂等に携わっていた。明治21年 (1888)、縁あってペテルブルグ大学の日本語科の講師に就任、1916年までおよそ30年間にわたって日本語の指導をした。彼には『日露通俗会話篇』・『日本語自習書』(V. P. パナーエフと共著) 等の著書がある。黒野の日本語指導は初級の日常会話から入っていったであろうが、『日本外史』などもテキストとして用いられたようだから、かなり高度の日本語能力の養成を目的としていたものと考えられる。

ポリワノフは1912年に大学を卒業、恩師であるクルトネ (Baudouin de Courtenay) の推挙によって比較言語学研究室に残り、論文作成に専念する。一方、ネ

フスキーの卒業は1914年（入学は1910年）、第一次世界大戦勃発という激動の年であった。しばらくエルミタージュ博物館に勤務。大学を卒業した二人は、その研究をすすめるフィールド日本が待っていた。

ポリワノフは、1914年（大正3）5月露日協会の援助で来日するのであるが、一方、彼より2年遅れの卒業生ネフスキーは既に1913年、在学中2ヶ月間という短期ではあったが日本旅行をしている。長崎経由で東京に滞在、帰国の折再来を期したと思われる。彼は1915年（大正4）、改めて官費留学生として二年間の予定で日本へやって来るのである。ポリワノフの場合、1915年の再来日を含めてもその滞在期間は半年余程度で長いとは言えないが、ネフスキーは当初2年の予定が帰国の年1917年、ロシア革命が起こり、それにつづく国内の厳しい政治状況の下に送金は停止され、帰国の機を逸してしまった。そのため、日本滞在は大幅に延び、来日して14年目の1929年秋、ようやく故国へ帰ることができた。その間、1921年（大正10）北海道出身の萬谷磯子と正式に結婚し、娘ネリを得ていたが後で呼びよせる約束で単身の帰国であった。（妻子のソ連行きは、これより数年後ようやく叶えられる。）

日本におけるポリワノフはその比較的短い期間を、長崎をはじめとして東京・土佐などいくつかの地点での方言調査、中でも音声・アクセントの研究に没頭し、新知見を得ることになる。一方ネフスキーは、14年という長期にわたって調査地点は北は北海道から南は沖縄宮古島にまで及び、アイヌ語や宮古方言の研究をしている。しかし彼は柳田国男・折口信夫等に師事しているのでもわかる通り民俗学にも強い関心を示した。「月と不死」・「アヤゴの研究」等はその中からうまれてくる。

帰国後のポリワノフは、革命政権の下ペトログラード大学教授となり（1919年）、一方、共産党に入党、中国革命家との交流の中で大学を辞してモスクワ（Moskva）へ。コミンテルンの極東部の要職についたが（1921）、やがてウズベク共和国のタシケント（Tashkent）へ赴任、ここで数年過した後、1926年35歳になった彼はモスクワへ帰って来る。その彼を待ち受けていたのはニコライ・マル（N. Ja. Marr）の「新言語学説」であった。この御用学説に対してポリワノフは反対し、批判をくりかえした。マルとは大学時代より知己の間柄であったし文通による交流もあったようであるが、その学説の内容に同意できなかったのである。そして終にモスクワの研究機関に居れなくなり、再びウズベク共和国サマルカンド（Samarkand）へ赴く（1929）。この年1929年は奇しくもネフスキーが日本での長期にわたる滞在を終えてようやく帰国を果たした年でもあった。

ネフスキーは、恩師アレクセーエフ教授等の厚意でレニングラード大学で教鞭をとる一方で、アジア博物館所蔵の西夏語文書の研究にうちこみ、母国での順風満帆の船出をしたかに見えたが、その先には予測もしない大嵐が待っていた。スターリ

ンによる粛清工作がはじまったのである。1937年10月、ネフスキーは逮捕され、その学者としての生命は絶たれた。(1945年2月14日没、享年53歳)一方、ポリワノフはサマルカンドから更にキルギス共和国のフルンゼ(Frunze)へ移り(1934)、その地で教育・研究に従事していたが、ネフスキーが捕えられた同じ年(1937)の3月彼も逮捕され、翌1938年1月25日死亡(享年47歳)。1960年以後兩人とも名誉回復がなされることによりその霊もいくらかは慰められることになったか。両俊秀の生涯は、日本との関係を含めて、ある部分は重なり合いながら運命の糸に操られるようにして悲劇的な終末を遂げたのだった。ポリワノフ・ネフスキー個人の個人的交流の具体的事実を知り得ないが、ネフスキー自身のことばによると、先輩ポリワノフに大きな影響をうけたことは事実と思われる。

(三) 長崎県西彼杵郡三重村

既述のごとく、第一次世界大戦が勃発し世界に暗雲たれこめる中、1914年(大正3)夏ポリワノフは初めて日本国を訪れ、その第一歩を長崎の地に印した。「ナガサキ(長崎)」は近世、長い鎖国の時代に日本で唯一世界に窓を開き続けて先進文化を吸収した所であり、はるかペテルブルグ(Petersburg)にもその名が伝えられていたはずである。長崎市稲佐の悟真寺境内にはロシア人の墓地もあり、近代に入ってから長崎を訪れたロシアの著名人も多い。例えば、³⁾ 天津事件で知られる、ロシア最後の皇太子アレクサンドロヴィチ・ニコライ殿下は、1891年(明24、ポリワノフ誕生の年でもある)。4月長崎へ入港、悟真寺を訪れて居られる。また、ロシア大使モレヴスキー・モーウィッチは、1909年(明42)9月、列車で来崎、悟真寺本堂での法会に出席している。

長崎を訪れたポリワノフがその方言調査のフィールドとして定めたのは当時の西彼杵郡三重村であった(現在の長崎市三重町。新長崎漁港の三重町への移転により活気あふれる町になりつつある)。この村には当時旅館が二つあって、一つは「こまつや旅館」、もう一つは「枺屋(ますや)旅館」。ポリワノフが宿泊したのは後者の「枺屋旅館」(現在、長崎市三重町345の地)であった。現在は旅館を廃業、しばらく下宿屋をしたこともある由であるがそれもやめて新しく建て直した家に池田研治・多美江夫妻が住んで居る。当時の「枺屋旅館」は浜辺に臨む二階家で、一階には家族が住み、二階が客室となっていて4部屋あった。ポリさん(土地の人々は彼を親しんでこう呼ぶ。)はその二階の4部屋の中の一室に泊っていた。「枺屋旅館」は現在その面影を残してはいないが、家の中に小さな池があって、これは当時のまゝ保存してあるとのことだからポリさんも多分それを眼にしたことであろう。村山七

郎氏が三重村を訪れた1972年（昭47）には、⁴⁾ ポリさんを知る岩エイさんに会うことができた由であるが、筆者が訪れた1989年（平成元）11月21日現在、残念ながら既になくなって居られたので、子息の岩謹吾氏（明治44年1911）に三重地区公民館の一室にてお会いした。しかし、氏自身はポリワノフが訪れた大正3年には幼少でポリさんの記憶がないとのことであった。エイさんは文房具屋をして居られて、実家である徳永家（現在、敷地は塀に囲まれ、倉庫は残っているが人は住んでいない。）は「枺屋旅館」のすぐ近くにあったのでポリさんの姿をよくみかけたものであろう。エイさんの兄の伊佐吉氏すなわち謹吾氏の伯父にあたる人も当時東京高商（一橋大学の前身校）の学生で夏休み帰省中であったためポリさんの相手をし、インフォーマントの役割を果たしたとのことである。

これより前、1913年、ポリワノフは母エカテリーナに死別、また恩師クルトネにふりかかった事件などで痛手をうけるが、その苦衷の中で書きあげたのが論文「日本語・琉球語音声比較概観」⁵⁾で、これは彼の言語研究の出発点とも言えるものである。この中で、日琉両語の母音対応・二重母音・祖語の子音体系・前舌破裂音の結合的变化・鼻音の音節的機能等について精緻な考察がなされている。そして日琉両語の転写の方法として国際音声学協会のアルファベットに依拠しながらも音声学上の恩師シチェルバ（L. V. Shcherba）が提案した補足をも加味している。この転写法は彼が日本へ来て方言調査をすすめる時にも有効に働くことになる。上記論文で比較されている日本語とは東京方言のことで、琉球語は首里方言を中心にしたものである。東京方言については大学の教師ネーティブスピーカの黒野義文の音声を耳にして観察することができたと思われるが、琉球語（首里方言など）については生の音声を聴く機会には恵まれなかった筈である。ポリワノフ自身が記すようにその情報源は、日琉祖語の三母音（a、i、u）説を提唱したことで知られるチェンバレン（Basil Hall Chamberlain）の著書⁶⁾などに依拠したものであろう。

長崎を訪れた時のポリワノフの知る生の日本語は東京方言唯一つであったとみられる。

天与の鋭い音楽的感性をもっていた彼（当初ピアニストを志望していたが交通事故で左手の肘から先を失い、言語学に転じたとのこと。）は日本語の音声そのものに深く興味をそそられたはずである。長崎県の三重村でインフォーマントの声に耳を傾けた時の彼の喜びの表情が目にかんてくる。はじめて耳にした、東京方言以外のナマの音声であった。この日を出発点として彼の音声観察は、土佐方言・京都方言・東京方言・東北方言へと進み、文献だけでは観察しがたい音声のパラメータとしての強さ（Stress）・高さ（Pitch）等をも知ることができ、日本語の音楽的アクセントの確認へと発展するのである。⁷⁾ 三重村での研究の成果は、帰国後、多くの著書・

論文として公表されることになるが、三重村のアクセント観察についてまとめたものとしては、『東洋語大学用の言語学概論』⁸⁾ (1928) 所収の「長崎県三重村方言における二つの音楽的アクセント」がある。この中で、三重村方言にあらわれる二つの音楽的アクセント（^{バリトン}尻低型、^{オクシトン}尻高型）のことが記述される。彼によれば、どの語も所与の音節数にとって可能な上記二つの音楽的アクセントの型に属し両者は対立している。語末において声が下がる（^{バリトン}尻低型）語は、その派生形（名詞変化・動詞活用などの諸形）も同じ型に属し、語末の音調が低くなる。一方、語末において声が高まる（^{オクシトン}尻高型）語は、その派生形も同じ型に属する。以下その事例を示す。

（尻低語および変化形の例）

（尻高語および変化形の例）

Ka _L U	（買ウ）	ha _Γ na	（花）
Ko _: _L ta	（買ッタ）	hana _Γ ga	（花ガ）
Kawa _L γ	（買ハナイ）	han'a _Γ :	（花ニハ）
Ko _: te _: _L ta	（買ッテオイタ）	han'a _: _Γ re	（花デ）
Ko _: te:tato _L ba	（買ッテオイタモノヲ）	hanaka _Γ ra	（花カラ）

（_L……バリトンの性格を最後のモラの前に示す印）
 （_Γ……オクシトンの性格を最後のモラの前に示す印）

彼は上記アクセント体系の物理的な側面を解明するために三重村出身の徳永伊佐吉氏（既述）をインフォーマントとして、東京帝国大学（心理学実験室）のカイモグラフの喉頭カプセルによって記録した音調曲線を対象に両型の各モラについて詳細な分析をしている。

三重村でのポリワーンフの研究結果としてもう一つ注目されるのは、三重村に残る民話や風俗を精密に記録して残しておいたことで、方言資料として貴重なものとなった。「日本方言学資料 長崎県西彼杵郡三重村方言」⁹⁾ がそれである。これは民話6編と三重村の風俗7編を収めたもので、以下その題目を彼の転写した通りに示す。

（民 話）

1. Çitakirisuγumenohana_Γši (舌切り雀の話)
2. hanasaka_Γγi: (花咲爺)
3. Kobutoiγi: nohana_Γši (こぶとり爺の話)
4. Sarukanika_Γššeγ (猿蟹合戦)
5. momotaro: nohana_Lši (桃太郎の話)
6. urašimata_Γro: (浦島太郎)

（三重村の風俗）

1. mije_Lno koro_Lmo mijenokoro_Lmo (三重の子供)
2. γu: jokka_Lno mogurauçi_Γno hana_Γši (十四日のもぐらうちの話)

3. ombi : nohana「śi ombi :「no hana「śi (鬼火の話)
4. gogwacugonči「no śekku「no hana「śi (五月五日の節句の話)
5. śu : śi「no hana「śi (宗旨の話)
6. wakkamoŋgumi「no hana「śi wakkamoŋguminohana「śi (若者組の話)
7. kekkon_Lno hana「śi kekkonnohana_Lśi (結婚の話)

彼特有の転写法によって表記し、これに三重村方言のアクセントの2型(尻低型・尻高型)を区別する_L「の印を付記して音声の実態が詳細にわかるように工夫されている。転写の仕方についても、語彙・アクセントにユレがあると認められる時は併記している部分もある。例えば、

itatemitai_Lba ita_Lte mitai「ba (行ってみたところ)

oi_Lga waśi_Lga (俺が)

to :_Lto to「 :_Lto : (とうとう) <いずれも hanasaka「ŋi : (花咲爺) より>

上記の題目にも mije_Lno koro_Lmo mijenokoro_Lmo (三重の子供) など併記の事例があった通りである。彼は方言研究の為の正確なテキストを作ることによってその目的があったことは勿論であるが、一方で、彼の興味は三重村に残る民話や習俗自体にもあったと推察される。ネフスキーが日本の各地に残る民俗に深い関心を示して数々の調査研究をしたように。母校ペテルブルグ大学には言語の学とともに民俗学研究のプログラムが充実していたものと考えられる。ポリワノフも、後年ウズベク共和国などへ赴き、言語の研究教育とともに民族学なども講じたことを思えば、三重の昔話や風俗に興味をもっていたのは当然で、彼にとって上記の資料は、方言学資料であるとともに民俗学の資料でもあった。

ポリさんは身体が大きく、調査研究のあいまに宿舎のすぐ前の浜辺(当時、旅館の前は砂浜であった。)に出てよく水泳をした。大きなポリさんが泳いでいると近所の子供たちが集まって来てめずらしそうに眺めていたということである。

(四) 言語学上の業績その他

既述のごとく1937年スターリンの粛清工作の中で投獄され、翌38年1月獄死したポリワノフは晩年自著の刊行もままならず、ある年などは中央で刊行されたものは書評一つであったという。そのため、原稿のままで未刊におわったものも多くその全容が公開されているとは必ずしも言えないようである。レオンテューヴ(A. A. Leont'ev)他編『ポリワノフ一般言語学論集選』¹⁰⁾所収の業績目録等を参照しながらその大要を述べたい。

ポリワノフの言語研究は、アジア諸語あるいは東洋語(日本語・中国語・ウズ

ベク語など)の個々の方言の記述的研究の成果を踏まえつつ、それを一般言語学的方面にも視野を広げて行ったところにあると考えられる。

われわれ日本人の立場からすれば、彼の日本語研究が一番の関心事である。既述のごとく、長崎県西彼杵郡三重村での方言調査を皮切りに、土佐・京都・東京等でも調査研究をすすめ、日本語の音楽的アクセントを解明するにいたる。これ等諸方言のアクセントの関係について次のように指摘する。¹¹⁾

京都方言・土佐方言のような「西」諸方言はもっとも古風な複雑な体系を示し、「東」諸方言(東京方言など)は原始日本語体系を著しく単純化したものである。一方、「南」諸方言はアクセント区別の無差別がすすみ、その極にあるのが南九州(熊本方言)、その前段階として長崎方言の二元体系(尻低型・尻高型)が存在する。

当時としては示唆に富む指摘であったと考えられる。彼は mora(モーラあるいはモラ)という韻律学の用語を日本語のアクセント記述に用いたはじめての研究者といわれ、また、方言の音声を転写するのに独自の工夫を試みた人でもあった。

次に、母音・子音に関しては次のような研究が知られる。母音については、「東北方言の母音」¹²⁾という論考。これは青森方言を中心に(秋田方言を一部参照)その母音体系を明らかにした。東北方言では母音の長さが均等化し(長母音消失)、二重母音が収縮して、a、e(秋田 ε)、o、i、ī、Ü(iは舌を平らにもちあげてつくる舌尖的な混合母音、Üは舌はほぼ同じようにして唇を丸めてつくられる)の母音が形成されたとしてその推移の過程を分析している。そして、子音の推移(Lautverschiebung)、唇の働きの弱まり(delabialization)、口蓋化子音の欠如、場所格の接尾辞-sa等についても東北方言の特殊性として言及している。子音については、例えば、「日本語における子音の諸カテゴリー」¹³⁾という論考。日本語方言資料として、東京市の方言・青森県津軽の方言・秋田市の方言・京都市の方言・土佐(高知)の諸木(もろぎ)村の方言・長崎県三重村の方言・熊本の方言・那覇市の琉球方言等を研究した彼は、それ等の知見をもとに現代標準語の子音のもろもろのカテゴリー(お互いに対立する子音グループ)として、

(1) 長い(重複)子音と短い子音

PP、tt、kk、ss~p、t、k、s

(2) 対の有声および無声のカテゴリー

b、d、g、z~p、t、k、s

(3) 対の「軟い」(口蓋化した又は口蓋的)子音と「硬い」(非口蓋化)子音とのカテゴリー

p', b', m', c', g', n', k', η', s', r', ç~p、b、m、t、d、n、k、g、η、r、h

等をあげ、それぞれについて各方言内部の状況およびそれ等のカテゴリーの起源についても考察を加えている。例えば、長い子音（重複子音）について。これは短い子音と形態的交替を示すとして、形容詞の強調形（接頭辞 *ma* のつく）と擬態語の単形（重複の収縮と接尾辞 *-ri*）はこの交替にもとづくもので、

makkuro / kuro（真黒、黒）	mašširo / širo（真白、白）
mannaka / naka（真中、中）	pikkari / pikapika（光る様）

これ等の重複子音の起源は重複が極度に縮小したため、つまり、ひとつの子音だけが重複するにいたったとみる。

ma - kkuro < *ma - kukuro < *ma - kuro - kuro
pikkari < *pika - pika - ri

そして、この縮小をもたらした要因は恐らく接辞（*-ri*、*ma-*など）の存在であろうと言及している。重複子音の起源についての推論には擬態語の語形の認定などやや性急なところもあるようであるが、接辞の機能を重視して考えている部分は示唆に富む。

日本語の語源についても深い関心を示し、その語源解釈は比較言語学的視座からユニークで大胆な見解が展開されるが、この点に関しては後述する。なお、O. V. プレットネルとの共著『日本語口語文法』¹⁴⁾（1930）もあることを付記する。

ポリワーフの日本語研究は、その音声学的面において独自性を発揮したとみるべきであろう。

日本語以外の個別言語については、中国語¹⁵⁾の他にアルタイ諸語（トルコ語・ウズベク語など）にも深い関心を示し、また、彼のいわゆるマライ諸語（マラヨ・ポリネシア語族またはオーストロネシア語族）にも眼を向けてその視野は広大である。

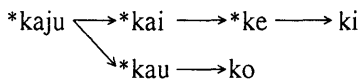
トルコ語については、原始トルコ語の長母音の再構を試み、¹⁶⁾ 1921年、中央アジアのウズベク共和国のタシケントへ赴いてから（1926年モスクワへ帰るが再び1929年ウズベキスタンへ。サマルカンド・タシケント、そしてキルギス共和国のフルンゼへ。）ウズベク語の方言調査に精励して、「タシケント方言の音構造」¹⁷⁾（1922）等を発表している。

一方、彼の眼は南の島々の言語にも向けられるのであるが、その直接の目的は日本語の形成・系統を考えるためであった。彼のフィールド調査はタガログ語（マライ諸語の一つ）一つに限られたようだが、彼の見解によれば、¹⁸⁾ 日本語はマライ・ポリネシア諸語と同系であり、言語諸事実の一部は同諸語と共通の源泉からうけついただものである。しかし、日本語は起源的には雑種（ハイブリッド）であって、南方的—南島の、オーストロネシア的要素と大陸的な朝鮮語（およびアルタイ的諸言語）と共通の要素との混合物（アマルガム）である、とする。また、日本語と南島語との

外部的類似点として、

- ① 語彙形態素の典型は2音節 (Kata、naka など)、形式的形態素は一音節である。
- ② 日本語に接頭辞があること (アルタイ諸語には接尾辞のみ)。
- ③ 日本語の形態の最も古い層における (完全および不完全) 重複の形態的働き等々9項目にわたって述べている。

一方、彼の見解に従えば、西日本諸方言とマライ語こそ強きアクセントがまじらない純粹の音楽的アクセントであり、両者を同源とみる重要点の一つと目される。こうした立場から、日本語の語源解釈においても南島語族への関係が追究されて行く。¹⁹⁾ 例えば、Ki (木) について。彼は、共通日本語・琉球語祖形として、*kVi (V は不明の質の母音) を推定し、一方で、マライ・ポリネシア諸語の kaju (派生形、kai、gai、kau) を対照させて、日本語は、



の推移を経て成立したものと解釈する。日本語の強調形の接頭辞 ma- についても、マライ・ポリネシア語の接頭辞 ma- と同じだとしてその関係を追究している。

彼の一般言語学に対する見解は主著とされる『東洋語大学用の言語学概論』(既出) や、没後30年刊行の『ポリワーフ一般言語学論集』(1968) によってみることができる。ポリワーフはポリグロット (Polyglot、多言語使用者) であった。英語・仏語・独語・中国語・日本語・ウズベク語等々16の言語 (あるいはそれ以上) に通じていたといわれる。上記『概論』の「形態論」の項には、ウズベク語 (タシケント方言)・シナ語 (北京方言)・日本語 (東京方言・京都方言・三重村方言)・ペルシア語 (タジク方言)・(古典) アラビア語などの言語が引用され、形式的形態素・語彙的形態素の考察その他が追究されている。また、「言語」という語の意味、「一般言語学」という用語の概念等について考察がされている部分もある。

ポリワーフは、ロシア語についても教育研究の立場から、『ロシア語教育法試論』²⁰⁾ (1935)、『ウズベク語と比較対照したロシア語文法』(1933) 等を著している。これは、いわゆる対照文法としての意義をもち得る。

言語学上の業績の他にも、彼は文学 (詩学)、フォークロア等に深い関心をもっていた。若いころ、ヤクビンスキー (L. P. Iakubinskii) 等と「詩的言語研究会」(Opoyaz オポヤーズ) のメンバーとしてロシア・フォルマリズムの批評運動に参加したこともあり、詩論も書いている。フォークロアについては、既述したごとく、日本で方言調査の過程で民話・風俗について精密なテキストをつくったことや、熊本方言をもとに、なぞなぞの形式タイプに興味を持ち、²¹⁾ これを、① Kajgaemono 考え物、② nazo なぞ にわけて考察したことなどがあげられる。後者は、言語遊戯の一つとし

てとらえることも出来、人々の言語生活の一断面としてフォークロアの視点から関心もたれたものと考えられる。多岐にわたるポリワノフの活躍がうかがわれる。

(五) 孤高の生涯

天才は世に容れられぬと言うが、言語学の分野で輝かしい業績を残したポリワノフの生涯は俗塵の中で誤解反撥を招き、社会生活上数々の不利益を被り、光と影の交錯する中で展開されて行く。若いころ、帝国主義戦争（第一次世界大戦）に対して反戦平和の意思を表明して逮捕され一週間獄中にあったこともある。彼の無垢の魂は戦争という名の殺戮をどうしても容認できなかったのであろう。ニコライ・マルの「新言語学説」に対して執拗に批判を加えたのも言語学徒としての良心によるものであった。政府公認の言語学説に公然と批判をするのは一身上の不利益につながることも明白である。それを承知で行ない、予想通り中央から疎外されたのである。

ロシア革命が起きると彼は勇躍して共産党に入党、政府機関の下で働くのであるが、当時ペトログラード大学教授であった彼の周辺同僚たちはこれをよしとせず、その結果、人間関係はイビツになり、苦渋の日々を過すことになった。1921年、大学を辞しモスクワへ去って行くのは同僚たちとの亀裂が大きくなっていたたまれなくなった結果と考えられる。

彼には、麻薬常習者・アルコール中毒者・浮浪者などのレッテルが張られ、その影の部分が強く印象に残るが、これも彼の無垢の魂が周辺の日和見主義に強く反撥して雄たけびをした後の空しさ故であろう。中央アジアへ赴任して後の、水を得た魚のような澆刺とした活躍ぶりを思い見よ。当地の暖かい人情に触れ、彼の傷ついた魂も再生したのである。しかし、過酷な運命が彼に襲いかかった。ネフスキーと同じく1937年逮捕入獄、翌38年獄死す。惜しみても余りある死であった。孤高の生涯であった。

〔注〕

- 1) 『月と不死』(N. ネフスキー、岡正雄編)東洋文庫185、平凡社、昭46・4
- 2) 注1)同書、所収「解説」(加藤九祚)による。
- 3) 『長崎を訪れた人々』明治篇・大正篇(高西直樹)、葦書房、1988年10月、1989年12月
- 4) 朝日新聞(夕刊)1972・6・28、村山七郎、『日本語の起源』(村山七郎・大林太良共著)弘文堂に所収(107頁)『日本語研究』(E. D. ポリワノフ著、村山七郎編訳)弘文堂、昭51・7にも「日本におけるポリワノフ」の(B)、三重村におけるポリワノフ、としてのせる。
- 5) 「日本語、琉球語音声比較概観」(帝室ロシア考古学協会東洋部報)第23巻Ⅰ～Ⅱ、ペテルブルグ、1914

- “Srvavniteli’no-fonetičeskij očerk japonskogo i rjukjuskogo jazykov” *Zapiski Vostočnogo otdelenija Rossijskogo arxeologičeskogo občestva*, X XIII (St. Petersburg, 1914)
- 6) Basil Hall Chamberlain, “Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language.” *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, X XIII, 1895.
- 7) 「東京方言における音楽的アクセント」(帝室科学アカデミー通報) IX、1915. “Muzykal’noe udarenie v govore Tokio”. *Izvestija Imperatorskoj Akademii nauk*, IX, 1915 で先学の論を訂し、確認する。
- 8) 『東洋語大学用の言語学概論』1928. “Vvedenie v jazykoznanie dlja vostokovednyx vuzov” (Leningrad, 1928)
- 9) 「日本方言学資料 長崎県西彼杵郡三重村の方言」(帝室ロシア考古学協会東洋部報) 23巻、ペトログラード、1915. “Materialy po japonskoj dialektologii. Govor derevni Mie, prefektury Nagasaki, uezda Nisi-Sonki. Teksty i perevod,” *Zapiski Vostočnogo otdelenija Rossijskogo arxeologičeskogo občestva*, X XIII (Petrograd, 1915). 吉町義雄「音声の研究」VI所収(1937・1)の本文を参照。
- 10) “E. D. POLIVANOV Selected Works Articles on General Linguistics” 1974.
- 11) 「日本語の音楽的アクセントに関する研究について(マライ諸語との関連において)」(第1中央アジア国立大学紀要) 4、タシケント、1924. “K rabote o muzykal’noj akcentuacii v japonskom jazyke (v svjazi s malajskimi)”, *Bjulleten’ I-go Sredne-Aziatskogo gosudarstvennogo universiteta*, No. 4 (Tashkent, 1924)
- 12) 「東北方言の母音」(ロシア科学アカデミー報告)、1924. “Vokalizm severno-vostočnyx japonskix govorov”, *Doklady Akademii nauk SSSR*, V (Leningrad, 1924)
- 13) 「日本語における子音の諸カテゴリー」(『日本語研究論集』ソ連科学アカデミー東洋学研究所) 1959. “Kategorii soglasnyx v japonskom jazyke”, *Japonskij lingvističeskij sbornik*, (Moscow, 1959)
- 14) 『日本語口語文法』(O. V. プレトネルと共著) 1930. “Grammatika japonskogo razgovornogo jazyka”, *Trudy Moskovskogo instituta vostokovedenija im. N. N. Narimanov*, X IV, 1930
- 15) 『現代中国語文法』(A. I. イヴァノフと共著) 1930. “Grammatika sovremennogo kitajskogo jazyka” *Trudy instituta vostokovedenija im. N. N. Narimanova*, X V, 1930.
- 16) 「原始トルコ語の長母音の問題について」(ロシア科学アカデミー報告) 1927. “K voprosu o dolgix glasnyx v obščetureckom prajazyke”, *Doklady Akademii nauk SSSR*, V. 1927.
- 17) 「タシケント方言の音構造」(科学と教育) 1922. “Zvukovoj sostav taškentskogo dialekta”, *Nauka i prosveščenie*, No. 1 (Tashkent, 1922)
- 18) 注 11) 同書
- 19) 「日本語語源辞典についての暫定報告」(東洋学諸問題、3、1960). “Predvaritel’noe soobščenie ob etimologičeskom slovare japonskogo jazyka”, *Problemy vostokovedenija*, 3, 1960.
- 20) 『ロシア語教育法試論』1935、 “Opyt častnoj metodiki prepodavanija russkogo jazyka uzbekam” (Tashkent-Samarkand, 1935)
『ウズベク語と比較対照したロシア語文法』1933、 “Russkaja grammatika v sopostavlennii s uzbekskim jazykom” (Tashkent, 1933)
- 21) 「日本のなぞなぞの形式タイプ」(人類学民族学博物館論文集) 5-1、1918、 “Formal’nye tipy japonskix zagadok”, *Sbornik Muzeja antropologii i étnografii*, V (Petrograd, 1918).

参考文献

- 1) 『日本語研究』(E. D. ポリワール著、村山七郎編訳) 昭 51・7、弘文堂、所収のポリワール各論考および訳者(村山七郎)あとがき等。
- 2) 『月と不死』(N. ネフスキー、岡正雄編) 東洋文庫 185、所収の「解説—ニコライ・ネフスキーの生涯」

(加藤九祚)

- 3) "E. D. POLIVANOV Selected Works Articles on General Linguistics" A. A. LEONTÉV等所収の、「生涯と活動」・「業績目録」。

上記三書のうち、1) の村山七郎氏の訳業に負うところが大きい。記して謝意を表す。

(1992年4月30日受理)